

## 答辞

厳しい冬の寒さが和らぎ春の訪れを感じる今日、私たちは卒業の日を迎えました。本日は多くの方々にお越しいただき、卒業式が行えますことを卒業生一同お礼申し上げます。

入学式では、川之江高校での三年間が楽しみであり、また少しの不安もありましたが、今では川之江高校を卒業できることを誇りに思い、幸せな三年間だったと感じています。そのくらい川之江高校で刻まれた思い出が鮮明に残っています。

思い返せば、川之江高校での三年間。私の側にはいつも応援がありました。六月半ばにいただいた「野球応援の副団長をやってみないか。」この言葉をうけて、任せていただける嬉しさと同時に不安もありました。私にとっての一番の不安は部活動と両立できるのか、ということです。この話をいただいたとき私はまだバスケットボール部で活動していました。通常三年生は六月の県総体で引退します。そんな中、より高みを目指した二人が残りました。本当は全員最後の大会までこのチームでバスケットをしたいはず。進路実現に向けて引退していった仲間のためにいい報告をしたい。そして、自分自身もチームのことが大好きだったので、ウィンターカップ県予選のために残りました。一方で、副団長をすることでチームに迷惑をかけてしまうという不安があり、顧問の先生に相談しました。そのとき「両方するのはしんどいから部活動をやめてもいい。」と言われました。しかし私は「ならば部活動を選ぶ」というとそれまで真顔だった先生の顔がほころび、「その言葉を聞いただけでいいから両方やりな。」と言っていただき、応援副団長と部活動、両方をするという覚悟を決めました。そこから応援練習が始まりました。最初は声も出しておらず動きもそろっていませんでしたが、日を追うごとに段々と精度が上がってきて私たちにも自信が付いていきました。そして「この仲間と応援ができて良かった。」とを感じるようになりました。一回戦は私たちにも緊張がありましたが、選手が本気で戦っている姿を見て自分が本気でバスケットボールと向き合っている姿と重なりました。私はその瞬間、全ての気持ちを届けたいと思い、たとえ声が出なくなってもいいという思いで、全力で応援しました。一生懸命戦う選手の姿はそのくらい私たちに大きな力を与えてくれるものでした。普段はくだらない話をして笑いあう仲間でも、練習中の姿を見たり、聞いたりしていた同級生の頑張りを知っていたからこそ私たちも悔し涙を流しました。しかし、結果よりも相手に試合の流れがあり、苦戦していても仲間を鼓舞し励ます姿、良いプレーがあったときは全員で喜ぶ姿を見て私たちは、多くの勇気と笑顔をいただきました。

秋には三年生にとって高校最後の体育祭が行われました。ここで私は応援される喜びを知りました。私は部活動を優先するため、応援合戦に参加しないと決めていました。しかし、クラスメイトから「副団長は紅瑚がやったらいいんじゃない？」と言われました。この言葉に嬉しい反面、クラスの活動に積極的に参加できない不安や申し訳なさもありました。本格的に応援合戦の練習が始まる前、自分が置かれている状況を皆に伝えました。副団長としての責任を十分に果たせないにもかかわらず副団長をうけたことを非難される覚悟もしました。ところが、クラスメイトの反応は違いました。「一緒に応援できないのは残念やけど部

活動頑張って！」と私を励まし、応援してくれました。私はそのとき、クラスの温かみを感じるとともにクラスメイトのことがもっと大好きになりました。演技を完成させていく中でたくさんの壁に立ち向かったからこそ本番前は笑顔が溢れており、改めてクラスの団結力を感じました。その全てが詰まった演技は私の中で紛れもなく一位でした。そのくらい皆の姿はかっこよかったです。

体育祭終了後はウィンターカップ県予選が始まり私たちはまず一回戦を勝ち上がりました。しかし、二回戦を目前にして、私たちの練習の雰囲気を見た顧問の先生から「今の雰囲気では、勝ち上がるのは難しい。」と言われました。今週でこのチームが終わるかも知れない。なんとなく感じてはいたけれど、はっきり言葉にされると悲しさや寂しさに涙が出るのを必死にこらえました。集合がかかった時に先生はチームにたくさん叱咤激励の言葉をかけてくださいました。そこから「このままではいけない」と気持ちの変化があり、皆の表情が変わりました。そして、二回戦・準々決勝も勝利を取めた私たちは県三位にたどりつきました。準々決勝は試合終了までどうなるかがわからないほどに緊迫した試合でした。接戦の中、勝ちが決まった瞬間チーム全員から大粒の涙が流れました。ここで勝つことができたのはチームの頑張り、多くの方々のご指導、保護者の方々の支えがあったことはもちろん、私の中ではクラスメイトの応援も心強かったと感じています。大会前に「明日頑張れ！」とクラスメイトがかけてくれた言葉の力は大きかったです。試合に勝ったときはクラスメイトも一緒に喜んでくれました。県三位という結果で有終の美を飾ることができましたが、それは同時にこのチームの終わりを意味します。女子バスケットボール部のマネージャーとして活動できたことがとても嬉しくて私を含めた同級生五人とたくさんの後輩、そして顧問の矢野先生。このチームが終わる寂しさを唐突に感じ一気に喪失感に襲われました。

私が三年間で感じたこと、それは応援の言葉はその人の心を熱くしてくれるものであるということです。私は仲間を応援する熱い気持ち、仲間から応援してもらえる喜びを知りました。そして三年間で多くの方々から「頑張れ！」という言葉をいただき、支えてもらいました。

学年団の先生を始めとする多くの先生方。私たちがこの三年間で数々の思い出を刻むことができたのは、先生方からたくさんの愛情をいただいたからです。学校で会うと笑顔で色々な話をしてくださいました。進路で悩んでいるときにはたくさん相談にのってくださいました。私たちが充実した学校生活を送ることができたのは先生方のおかげです。三年間、一緒にたくさん笑い、たくさん叱っていただいたことで一人の「人間」として成長することができました。学校行事、部活動、進路で多くの先生からいただいた「頑張れ！」という応援が私たちを前に進ませてくださいました。三年間本当にお世話になりました。

保護者の皆様。私たちが一番感謝を伝えたいのは家族です。一緒に過ごす中でたくさんぶつかる日もありました。しかし、高校生活を頑張れたのも、部活動を頑張れたのも家族がいたからです。どれだけ喧嘩をしても、生意気なことを言っても、最後にかけてくれる言葉は「頑張れ！」という応援の言葉でした。その言葉に何度救われたかわかりません。そして毎

朝お弁当を作ってくれてありがとうございました。お弁当の美味しさと栄養も私たちにとって力強い応援でした。これからも心配をかけるとは思いますが、次は私たちが家族を支えられようにそれぞれの道で成長し、少しでも恩返しができるよう頑張ります。

在校生の皆さん。これからの日々は思っているよりもすぐに過ぎ去り卒業を迎えます。悔いが残らないよう過ごすために何事にも全力で取り組み、しんどいと思うことも楽しんでください。そして仲間と過ごす残りの日々で得る多くの学びを大切にしてください。皆さんの周りには皆さんを応援してくれるたくさんの人がいます。その応援はときに信じられないほど大きな力になります。その力を受け取り、また誰かに渡して苦難の先にある夢をつかみ取ってください。

同級生の皆。夏頃は休みがあると喜んでいたものの、冬になると皆と会えなくなる日が近づいてくることに寂しさを覚えるようになりました。二月になると登校が週に一度になり学校までの一週間が長いように感じました。だからこそ、皆と会える日は楽しくてより笑顔になれました。他愛のない話で盛り上がり、笑い合った休み時間。仲間とぶつかったこともあった文化祭・体育祭。でも最後は成功し、うれしさに泣き合いました。この思い出は一生忘れません。皆が同級生でよかった。三年間本当にありがとう。

川之江高校で刻んだ仲間との思い出、そして川之江高校でしか得ることができなかった多くの学びや感謝を大切に、私たちはそれぞれの道へ踏み出していきます。また、会える日を楽しみにしています。たくさんの思い出をありがとうございました。

令和七年三月一日

卒業生代表 久保 紅瑚